

靈

剋

(たまきはる)

田中みどり

靈刻 1 計22例

枕詞タマキハルは、上代文献に於いて、

古事記 多麻岐波流 1

日本書紀 多摩岐波屢 1

多摩枳波屢 1

多葬者破屢 1

萬葉集 多末伎波流 2

多麻伎波流 2

多麻吉波流 1

多麻枳波流 1

玉切 3

玉剋春 1

玉剋 1

靈寸春 1

靈剋 5

の如く表記され、^①「うち」(記1・紀3・萬葉2)「命」(萬葉14)「代」(萬葉1)「吾」(萬葉1)などに懸る。

タマキハル・タマキハル両説があるが、萬葉の一音一字表記(6例)ならざるものの全て(12例)が、タマ(玉・靈)とキハル(切・剋・刻・剋春・寸春)との複合より成つてゐることにより、語源はどうであれ、表記者に「タマキハル」の意識のあつたことは、動かせないことであらう。そして、その際に、タマは「玉・靈」、キハルは「切・剋・刻・寸」として把へられてゐた、といふことが、現在の私達に遺されてゐる事実である。その場合の「タマキハル」が如何なる意味であつたかをさぐるのが、本稿のねらいである。

珠玉のタマと靈魂のタマとは、記紀では書き分けられてゐるが、萬葉では珠玉は「多麻・多萬・玉・珠」で表記し、靈魂は「多麻・靈・玉」のやうに、「玉」で表記したものもある。本来は玉を貫く緒であるタマノヲが、人と人とを結ぶものの象徴(魂の緒)として表はされる

場合もあり、更に枕詞タマカギルのやうに、珠玉の微光のゆらめきの中に、靈魂が面影に見えることを重ね合はせたイメーヅもあつて、珠玉と靈魂とは全く関はりのないものではない。靈魂を「玉」と表記したのは、珠玉に靈魂の現象的象徴を見た萬葉人の心の表はれであつたらう。一方、珠玉のタマをはじめ、タマノヲやタマカギル・タマヅサノ・タマモヨシ・アラタマノなどのタマには、「玉」の表記があつて、「靈」の表記は皆無である。萬葉集に於いて「靈」の表記を有つものは、

クスシ	靈	2
タマ	靈	1
ミタマ	御靈	1
オホクニミタマ	大國靈	1
コトダマ	言靈	1
	事靈	2
タマヂハフ	靈治波布	1
タマキハル	靈寸春	1
	靈剋	5
	靈刻	1
		計16例

に過ぎない。クスシ・タマ・ミタマ・オホクニミタマ・コトダマ・タマヂハフはいづれも、直接靈魂に關はる言葉である。このことから、タマキハルもまた、同じく靈魂に關はる言葉ではなかつたか、と想定される。

次に、キハルについて。

『類聚名義抄』に、

切 サク、キル、モク、クヒシハル、タシカニ

剋 キザス、キザム、タシカニ、クヒシハル

尅 トキ、キサム、キサス

刻 キザム、キル、トキ、エル

寸 キダく

と訓む。また『康熙字典』に、

切チ (説文) 剋也。(廣韻) 割也。刻也。

刻キ (説文) 鏤也。(玉篇) 割也。(韻會) 刻一漏也。鏤一漏箭。

以候チヒノ 晷カゲ 為カゲ 刻キ。故因謂ユ 晷カゲ 度トキ 曰フ 刻キ。

とある。

カタチ「形」「象」(名義抄)をカタトル「形」「象」(同)際、キザム「刻」「鏤」「雕」「剋」「剋」(同)ことによつたものをキサ「象」(同)と言つた。それはキル「切」「刻」「剋」(同)でありつつ、「刻エル」「鏤ホリハム、エル」「雕エル」(同)でもあつて、単なる切断ではなく線ないし形を形成することである。またそれは、一個のものを二個に切断するのではなく、數個に切断し、「寸 キダく、ツダく」「段 キル、ツタく」(同)なる状態にすることもある。

萬葉集でタマキハル「玉剋」「靈剋」とも表はし得たものを、「玉剋春」と表記し、また「靈寸春」と表記したのであるから、その「春」の文字は単に音を表はすだけの文字と見てよいが、右に述べた所から、「靈寸春」の「寸」の表はす意味も、「切」「剋」「刻」を離れ

るものではないので、これも意義を表はす表記と見たい。

以上のことから、「切」「剋」「寸」の意義は全く同じ概念に集約でき、「キザム」とくることが出来る。即ち、タマキハルのキハルは、「キザム」といふ意義を有つと考へることが出来るのである。

次に、タマキハルの諸例を検討する。

二

1 多麻岐波流 内の朝臣 汝こそは 世の長人 そらみつ 大和の國に 雁卵産と聞くや (記七一歌謡)

2 彼方の あらら松原 松原に 渡り行きて 櫓弓に まり矢を副へ 貴人は 貴人どちや 親友はも 親友どち いざ闘はな我は 多摩岐波屢 内の朝臣が 腹内は 小石あれや いざ闘はな我は (紀二八歌謡)

3 いざ吾君 五十狭茅宿禰 多摩枳波屢 内の朝臣が 頭椎の痛手負はずは 鳩鳥の 潜させな (紀二九歌謡)

4 多葬耆破屢 内の朝臣 汝こそは 世の遠人 汝こそは 國の長人 秋津島 大和の國に 雁卵産と 汝は聞かすや (紀六二歌謡)

記紀いづれも、ウチノアソ武内宿禰に懸る。1及び4で「世の長人」「世の遠人・國の長人」と形容される武内宿禰は、景行三年生ま

れ、六二歌謡の仁徳五十年には二百九十歳と言はれる。大和國宇智郡を本貫とする氏で、ウチとは「宇智」の謂である。その宇智を玉造りの本拠地として、「玉切ル」が宇智に懸るとする説(武田祐吉『増訂本萬葉集全註釋』)もある。この武田説の場合、タマキハルは玉の製造に関はり、タマの形が形成される(キザム)ことである、といふことになる。

珠玉^⑥には、貝・土・石・埋木・玻璃・金属製のものがあり、その最もさかんになるのは古墳時代である。

『類聚名義抄』の

研	ミガク、スル、ケツル
砵	ミガク
磨	ミカク
碧	タマ、ミカク
磋	ミガク
玉	琢玉 ^{ミカク}
琢	ミガク
填	ミカク
精	ミカク、タマシヒ
磨	ミガク
治	ミカク
治	キル、ミカク
玖	ミガク
攻	キル、ウツ、ミガク、ツクル

陶 ミカク

銘 キサム、チリハム、ミカク

鎔 トロモス、カネネヤス、イル、ミカク

鍊 ネル、カネキタフ、カネネル、ネヤス、カナシル、ミカク

などより、珠玉の製造は、ミガクと言つたことが知られる。そのミガクとキハルとが同じであるならば、「タマキハル」は「玉造」の意となることはできよう。しかしその確証は無く、また、さうであるとしても、萬葉のタマキハルがイノチに懸つてゐるやうな場合には、従来謂はれてゐるやうに、その懸り方を「魂極る命」の如く他に求めねばならなくなつて来る。

『時代別国語大辞典上代編』では、タマキハルがイノチに懸るものに関して、

萬葉になつて現われ、記紀以来の枕詞タマキハルを新たに解釈して別の使い方をしたものであらう。靈^{たま}極ルとすることに對して、当時のタマの意識と抵触するのではないかという疑問もあるが、古語の解釈であり、しかも枕詞として固定しているものの説明であるとすれば、当時においても多少の無理はあつたと考える方が自然だともいえよう。

と述べるのであるが、果たしてさうか。古今集以後の枕詞ならともかく、実質的なものを比喻として、述べたいことが、らの世界を象徴的によりふくらませ、手にとるやうに見ようとするのが、萬葉集の枕詞の技法である。そこに「当時においても多少の無理はあつた」と考へる余地はない。「新たに解釈」するならば「新たに解釈」できるだけの

論理がそこに無くてはならないであらう。代匠記・冠辭考などの「魂極る」説が「当時のタマの意識と抵触する」ならば、語義は他にあると考へねばならないであらう。

三

次に萬葉集を検討する。

1 玉剋春 宇智の大野に 馬並めて 朝踏ますらむ その草深野
(1四 間人連老)

2 かくのみし 恋ひや渡らむ 玉切 命も知らぬ 年は経につつ
(11 二三七四 正述心緒 人麻呂歌集)

3 かくしつつ あらくを良みぞ 靈剋 短き命を 長く欲りする
(6 九七五 中納言安倍廣庭卿)

4 かくのみし 恋ひし渡れば 靈剋 命も我は 惜しけくもなし
(9 一七六九 相聞 抜氣大首)

5 我が背子が その名告らじと 玉切 命は捨てつ 忘れたまふ
な (11 二五三一 正述心緒)

6 靈寸春 吾が山の上に 立つ霞 立つとも居とも 君がまにま
に (10 一九二二 春相聞 寄霞)

7 ……多摩積波流 命惜しけど せむすべもなし (5 八〇四 山上憶良)

8 靈剋 うちの限りは (瞻浮州の人の寿一百二十年なることを謂ふ)
平らけく 安くもあらむを 事もなく 喪なくもあらむを……

(5 八九七 山上憶良)

9……やくやくに かたちくづほり 朝な朝な 言ふこと止み

靈剋 命絶えぬれ…… (5九〇四 山上憶良)

10玉切 命に向かひ 恋ひむゆは 君がみ舟の 梶柄にもが

(8一四五五 笠金村)

11靈剋 命は知らず 松が枝を 結ぶ心は 長くとそ思ふ (6

一〇四三 大伴家持)

12……多麻伎波流 命惜しけど せむすべの たどきを知らに…

… (17三九六二 大伴家持)

13……多麻伎波流 命惜しけど せむすべの たどきを知らに…

… (17三九六九 大伴家持)

14……うつせみの 名を争ふと 玉剋 命も捨てて…… (19四二

一一 大伴家持)

15……うつせみの 世の人なれば 多末伎波流 命も知らず……

(20四四〇八 大伴家持)

16……古ゆ あり来にければ こごしかも 岩の神さび 多末伎

波流 幾代経にけむ…… (17四〇〇三 大伴池主)

17直に逢ひて 見てばのみこそ 靈剋 命に向かふ 我が恋止ま

め (4六七八 中臣女郎)

18我妹子に 恋ふるに我は 多麻吉波流 短き命も 惜しけくも

なし (15三七四四 中臣朝臣宅守)

(配列は『作者類別年代順萬葉集』の年代順に拠る。)

以上、「宇智の大野」に懸るもの1例、「うちの限り」1例、「(幾)

代」1例、「命」14例、「吾(が山の土)」1例である。

いまひとつ、

19年切 世までと定め 頼みたる 君によりては 言繁くとも

(11二九九八 正述心緒 人麻呂歌集)

があり、「年切」は「玉切」の誤りとする説もあるが、これはそのま
まトシキハルと考へる。

「宇智の大野」(1)の宇智は記紀の「内の朝臣」の内(宇智)に同
じ、また、「うちの限り」はその注に「瞻浮州の人の寿一百二十年な
ることを謂ふ。」(8)とあつて長寿に関連のあることが、武内宿禰の
長寿と符合する。「うちの限り」のウチは「現・顯」の名詞形「現」
で、武内宿禰は「世の長人」「世の遠人・國の長人」など長寿の意で
「現の朝臣」と呼ばれた、とも考へられよう。

……あらたまの 登斯賀岐布禮婆 あらたまの 都紀波岐閑由

久…… (記二八歌謡)

で「年(がきふ)」「月(はきへゆく)」に懸る枕詞アラタマノが、

。あらたまの 伎倍乃波也之尔 汝を立てて 行きかつましじ

いを先立たね (萬葉14三三三三)

で動詞キフの連用形キへと同音の地名キへ「寸戸」に懸る場合もあ
る、といふ例もあり、「現」に懸る枕詞タマキハルが、同音故に地名
「宇智」に懸ることは、十分考へ得ることであらう。萬葉初出例「た
まきはる宇智の大野」(1四)はかやうな懸り方をするものであり、記
紀の「たまきはるうちの朝臣」は、「現」に武内の「内(宇智)」をも
響かせた二重の意味内容を有つてゐたものであつたのではなからう

か。

以上の如く考へれば記紀のタマキハルは萬葉のタマキハルを覆ふものとなる。これに限らず、記紀歌謡は、音数律などから、萬葉より古い形態のものと考へられてゐるが、

。君が行き 日長くなりぬ 山多都祢 迎へか行かむ 待ちにか待たむ (萬葉2八五 磐姫皇后)

。君が行き 日長くなりぬ 山多豆乃 迎へを行かむ 待つには待たじ (萬葉2九〇 古事記曰 衣通王)

。君が行き 日長くなりぬ 夜麻多豆能 迎へを行かむ 待つには待たじ 「ここに山たづと云へるは今の造木なり」 (記八八歌謡)

のやうに、萬葉のヤマタヅネが本来である枕詞ヤマタヅノが、記にある、といふやうな例もあり、必ずしも記紀例が古態を示すとは言ひ切れぬ側面を有つ。また、記紀は歌数が少く、そこにとどめられなかつた用例も数多く存在するはづである。従つて、枕詞の意義に関しても、常に記紀にあるものが古く、萬葉のものは全くそれより新しい、と断定する根拠は皆無なのである。

四

ところで、右に述べた枕詞アラタマノは、一般に、年・月に懸るものと考へられ、また、

かくのみや 息つき居らむ 阿良多麻能 吉倍由久等志乃限
り知らずて (萬葉5八八一 山上憶良)

などの「吉倍」(「来経」と考へられてゐる。)と同音であるところから、地名「^{キハ}寸戸」に懸るものである、と解釈されてゐる。而して、このキフ(来経)は、『時代別国語大辞典上代編』に、

①経過する。来ては去つて行く。時間に関して用いる。動詞来と経の複合。

②ずっと過して行く。

〔考〕「云^{キハ}支閼丘^ニ者、宗形大神云、我可^{キハ}産之月^{キハ}尽、故曰^{キハ}支閼丘^ニ」(播磨風土記託賀郡)の地名説話からもキフの存在が推定できるが、本項の例とすべきものか、あるいは、別に^{キハ}尽フという動詞を考えるべきものか、あきらかでない。

とし、また『萬葉集注釋』巻四・六七八のタマキハルの項に、

そのつづきについて冠辞考に「多麻は魂なり、岐波流は極にて、人の生れしより、ながらふる涯を遙にかけていふ語也」とあるに由るべきでないかと思ふ。それは前の「うち」にかかる場合とは別の解釈になるが、それはこの枕詞の本義が忘れられて、「あしひきの」(二・一〇七)の場合同様、人麻呂などによつて第二の解釈が行はれたと見るのである。但、「きはまる」が「きはる」になつたのでなしに

かふ さふ つたふ をふ
かはる さはる つたはる をはる

の如く、「きふ」に對して「きはる」があつたので、その「きふ」といふのは、播磨風土記託賀郡支閼岡の條に、「云^{キハ}支閼丘^ニ者、宗形大神云、我可^{キハ}産之月^{キハ}盡、故曰^{キハ}支閼丘^ニ」とある「支閼」は

「きふ」といふ下二段動詞の連用形で、「盡」の漢字に相當する意の言葉で、それがラ行四段に活用する「きはる」ともなつたのではないかと思はれる。従つて、「きはる」は「きはまる」の約でなく、そのまゝで盡るとか極るとかいふ意の語であつたので、「魂極」^{タマキハル}として解くべきでないかと思ふ。

とあり、キハルとの関連の考へられもする語であるのである。

そこでまづアラタマノの意味を考へることにより、キフの意味を明らかにしたい。

枕詞アラタマノは、

記	阿良多麻能	2
萬葉	安良多末乃	1
	安良多末能	2
	安良多麻乃	3
	阿良多麻能	2
	荒玉乃	5
	荒玉能	1
	荒玉之	7
	荒珠乃	1
	荒璞能	1
	荒玉	1
	荒珠	1
	鹿玉	1

璞之 4
璞 2
未玉 1 計35例

で以つて表記され、直接的には「年」「月」「す戸(地名)」に懸り、「立つ月ごとに」「月反るまで」「月の易はれば」「月の経ぬれば」「月日数みつつ」「月重なりて」「年は果つれど」「年行き反り」「年は来去りて」「年のきふれど」「五年経れど」「年の緒長く」などを次句とする。

月が経過し果てれば、更に新しい月が立ち、月が易はり、月日を數んでゆくうち、月重なり、年果て、年行き反り、年は来ては去り、年月は経、年の緒長く、時間は過ぎてゆく。一月・一年が果てれば、更に新しい一月・一年が来、年月は更まる。

アラタマは、「アラタに接尾語マが接して『新たなる情態』を意味した」とする説^④があるが、上に見たやうに、アラタマノが懸つていく「月」「年」は、単にその新しさの積み重ねがかへりみられてゐるのではなく(であるなら、「月立つ」「立つ月」「年は来」などにのみ懸るであらう。あるいは、「新年乃始乃」(20四五一六)のごと、「年の始」などに懸つてしかるべきであらう。)、更まる、即ち、新たに來ると同時に経過する、そのことが繰り返されるものとして把へられてゐるのであるから、これはあたらない。言ひ換へれば、アラタマノは単に「月」「年」のみに懸るものではなく、「立つ月」「年は果つれ」など修飾語・述語を含めた全体に懸つてゐるのである。「あらたまの吉倍由久等志乃」(5八八一)などを経過してできた「あらたま

の伎倍乃波也之尔」(14三三五)など、地名(寸戸)に懸る場合のみ、アラタマノは單語に懸ると言ふことができよう。

枕詞タマガイルについても、従来言はれてゐるやうなホノカに懸るのみならず、ホノカニミユに懸るものであることを、述べたことがある。

従来、枕詞は語に懸るものであると言はれて来たが、それは枕詞が形骸化した王朝以後に於いて言ひ得ることである。上代の枕詞は、語の範圍にとどまらず、句に懸る場合もあり、また歌一首全体の象徴ともなり得るやうな、人々の共有する呪的・美的表象なのである。

。物皆は 新吉 ただしくも 人は古りゆく 宜しかるべし
(10一八八五)

この四段動詞アラタマルが、アラタマノの原義であらう。その語幹アラタマが、同音の名詞アラタマ(璞)と交錯することによつて、修飾格格助詞ノを分出し、アラタマノと成つたものと考へられる。イハバシルがイハバシノ、ヤマタヅネがヤマタヅノとなるのと、それは同じ原理である。

。石走 垂水の水の はしきやし 君に恋ふらく 我が心から
(12三〇二五)

。青みづら 依網の原に 人も逢はぬかも 石走 近江県の 物語りせむ (7二二八七)

。飛鳥川 明日も渡らむ 石走 遠き心は 思ほえぬかも (11)

二七〇二

△君が行き 日長くなりぬ 山多都祢 迎へか行かむ 待ちにか待たむ (2八五)

△君が行き 日長くなりぬ 山多豆乃 迎へを行かむ 待つには待たじ (2九〇)

かやうな、アラタマルの義のアラタマノが、「璞」と交錯する時、年々は恰も緒に貫かれた玉の如、新に來ては去り、数珠つなぎに連続してゐるが故に、「アラタマノ 年の緒長く」(10二〇八九)のやうな表現も生まれて來たのであらう。

五

ところで、

。あらたまの 年が岐布禮ば あらたまの 月は岐閑ゆく (記

二八歌謡)

。あらたまの 月日も伎倍ぬ (15三六九二)

。あらたまの 吉倍ゆく年の 限り知らずて (5八八一)

。萬世に 年は岐布とも (5八三〇)

などの下二段動詞キフには、通常「来経」といふ義が考へられてゐる。しかしながら、この下二段動詞キフには、右の自動詞の外、

。はねず色の うつろひ易き 心あれば 年乎曾寸経 言は絶えず (12三〇七四)

の如く他動詞である場合もある。この他動詞(過ごす)には、キフが

「来経」であるとする従来の説中の「来」の入り込む余地は無く、一語動詞と考へられよう。であるならば、自動詞形キフもまた、「過ぎる」の義の一語動詞と考へるのが自然であらう。時間が経過する、もしくは時間を過ごすことが、キフである。その一語動詞キフの語根のキは、キノ（昨夜）・キノフ（昨日）また過去の助動詞キと、その出自を同じくするものであつたのではないかと考へられる。

『播磨風土記託賀郡』支閼丘の条「云支閼者 宗形大神云 我可産之月盡 故曰支閼丘」に於ける「支閼」も即ちこれである。この直前に『播磨風土記託賀郡』袁布山の条「云袁布山」者 昔 宗形大神奥津嶋比賣命 任伊和大神之子 到_ニ来此山_ニ云 我可_レ産之時訖 故曰_ニ袁布山_ニとある。その「時」訖——袁布」の関係と「月」盡——支閼」の関係とは同じであらう。岩波日本古典文学大系「風土記」頭注にある如く、「我可産之時訖」は「懷妊の時期が終つて出産すべき時になつた」、「我可産之月盡」は「懷妊の月が経過し終つて出産すべき時になつた」の意で、「時」「月」は懷妊の期間、「訖」「盡」はその期間が経過し終つたことを表はす。

「過ぎる」といふ語は時間の経過に重点を置く語であり、「訖」「盡」といふ語は作用の完了ないし終了に重点を置く語である。その「訖」「盡」が「時」「月」（期間）を主語とする時、「訖」「盡」は、単に作用の終結を示す語ではなく、作用の完了を示す語であり、完了とはそこに至る経過に關する時間的なものであつて、「訖」「盡」は「時間経過した」といふ意味に外ならない。また「過ぎる」も、例へば「五年過ぎた。」と言へば、完了した時点から結果的に時間の眺めら

れることである。「我可産之時訖 故曰袁布山」「我可産之月盡 故曰支閼丘」に、「訖」と「袁布」「盡」と「支閼」とが、「故」で結ばれる由縁である。

上述の『時代別国語大辞典上代編』『萬葉集注釋』はいづれも、動詞キフを「来経」とし、風土記の「盡」を作用の終結の意味にとつてゐる点に問題があつたのである。

六

タマキハルのキハルは、五に述べた、下二段動詞「訖」ヲフよりヲハルの派生したと同じく、下二段動詞キフより派生した自動詞であらう。同じ派生の仕方の動詞に、当アツ——アタル、掛カク——カカル、替カフ——カハル、極キハム——キハマル、離サク——サカル、障サフ——サハル、統スブ——スバル、迫セム——セマル、備ソナフ——ソナハル、止トム——トマル、隔ヘダツ——ヘダタル、罷マク——マカル、分ワク——ワカルがある。かかる派生語は、原の動詞に「生^ル」出自の陳述語「アル」がついたもので、原の動詞の作用性を確定する、ないし動作が終着点に到達した結果ものごとが置かれた状態を表はし、自動詞とするものである。人が介入せず、そのものの自体に即してものが見られた時、作用・状態は「生^ル」（現象する）ものと見られる。その意味で、同じく「生^ル」出自と見られる自発の助詞「ル」につながる面を有つ。

かやうな「ウ——アル」系自動詞キハルの意義は、「年月が一月一、一年一年、経過する」作用ないしその状態であつた、と考へる。

キハルが「切キル」「尅キザム、トキ」「刻キル、キザム、トキ」(名義抄)「漏尅トキノキザミ」(紀とも訓む「切」「尅(尅)」「刻」によつて多く表記されてゐるのも、キフに由来するその時間(トキ)の区切り(キル、キザム)の意識からであつたであらう。

七

「年の緒」は、自然恒常に關はつて「荒玉乃年緒永照る月」(萬葉12三〇七)であるよりも、「想思はぬ人の故にか璞之年緒長、吾が恋ひ居らむ」(萬葉11二五三四)のごと人事愛憐に關はつての年月を言ふことが多い。その「アラタ、マノトシノヲ」は「タ、マノヲ」と響き合ふものを有つてゐる。

「玉の緒」は本来、玉を貫く緒である。だがそれは、

。生緒尔 念へば苦し 玉緒乃 絶えて乱れな 知らば知るとも

(11二七八八 寄物陳思)

のやうに、この世に生きてゐる力の絆(イキノヲ)を介して、

。葦の根の ねもころ思ひて 結びてし 玉の緒といはば 人解

かめやも(7一三二四 譬喩歌 寄玉)

のやうに、それを人と人とを結ぶものの象徴(魂の緒)として語る場合もある。玉の緒を「搓り」(4七六三)、「継ぎ」(13三二五五)、「結び」(7一三二四)、「くぐり寄せ」(11二七九〇)、「間も置かず 見まく欲り」(11二七九三)、「長く」(13三三三四)、「絶えじと念ふ」(11二七八七)が、「念ひ乱れて」(11二三六五)、「絶えて乱れて」(12三〇八三)、「絶えて別れば」(11二八二六)、「長き命」(12三〇八二)も愛もはかなく短いも

の「玉の緒ばかり」(12三〇八六)頼りないもの「玉の緒の 現し心や」(11二七九二)のやうに感じられる。

。死にし妻を悲傷して、高橋朝臣の作る歌一首 并せて短歌
白たへの 袖さし交へて なびき寝し 我が黒髪の ま白髪に
なりなむ極み 新代に ともにあらむと 玉の緒の 絶えじ
い妹と 結びてし ことは果たさず 思へりし 心は遂げず
白たへの 手本を別れ にぎびにし 家ゆも出でて みどり子
の 泣くをも置きて 朝霧の おほになりつつ 山背の 相楽
山の 山のまに 行き過ぎぬれば 言はむすべ せむすべ知ら
に 我妹子と さ寝しつま屋に 朝には 出で立ち偲ひ 夕に
は 入り居嘆かひ わきばさむ 子の泣くごとに 男じもの
負ひみ抱きみ 朝鳥の 音のみ泣きつつ 恋ふれども 験をな
みと 言問はぬ ものにはあれど 我妹子が 入りにし山を
よすかとぞ思ふ

反歌

うつせみの 世の事なれば 外に見し 山をや今は よすかと
思はむ

朝鳥の 音のみし泣かむ 我妹子に 今また更に 逢ふよしを
なみ (3四八一・四八二・四八三)

。恋ふること まされる今は 玉の緒の 絶えて乱れて 死ぬべ
く念ほゆ (12三〇八三)

に見られるやうに、萬葉人にとつて死は、また離別は、魂と魂を結ぶ絆(緒)の断絶・喪失を意味し、また魂の緒の断絶・喪失は命の死を意

味した。魂の緒を結ぶことは「うつせみの 世の事」(四八二)である。

「息の緒」「年の緒」は、生命・時間を一呼吸・一年を単位とする非連続的連続体と見て、個々の単位を貫いてゐるものを、この「玉の緒」の「緒」でもつて喩へたものである。その「緒」は直ちに「命」である。と言ふのは、

己が命を 盗み死せむと 意能賀衰袁 奴須美斯勢牟登 (記三歌謡)

(紀一八では「鉄廻鐵鳥塙 志齊務若」)

に於いて、「命」を「盗む」ことが死を齎すと読み得、生命現象を維持する力を具体物の如く想定してゐることが、如実に読みとられるからである。魂・息・年は、恰も玉のごと、かかるヲ(命・緒)によつて貫かれてゐるのである。

八

。古ゆ 人の言ひ来る 老人の 變若といふ水そ 名に負ふ瀧の瀬 (六一〇三四)

のヲツは、七に述べたヲ(命)の動詞形と見られ、「生命力の溢れる」ことを言ふ。形容詞形ウツシ(現・顯)は「生命力が象となつて現はれること・顯らかであること」、名詞形ヲツツ・ウツツ・ウチ(現)はその時間である。

明の背後には未明がある。現はれる以上は未現・未必(ウツタヘニ・ウタガタモ)が前提されてゐるのでなければならない。生命の現象はかかる未明によつて支へられ、またそれを齎すものは人智の及ばぬものながら靈(タマ・チ)として把握されて来た。アル(生)もウチ(現)

も、その背後の未明をふまへつつ、しかしながら生命自体の現実性・人間自体の現実性ながらに、現実の側からその現実相の側面を言ひ表はした語である。背後のものは「未必」(ウタガタモ)の如く、現実の必然性の可能の上に立脚し、否定語を伴つて言ひ表はされる。

キフことがかかる現実相に於いて見られた時キハルの意味するものは、とりわけその現実の時間、とくには春夏秋冬を一つの周期とする一年や「息」「年」などを単位とする個の「寿命」に関はるものであつた。「寿命」の生誕から終焉までの期間を「代」といひ、それは生きてゐる間がこの世であるといふ「世」にもつながる一方、一年一年の区切りといふ自然の節理と重なり合ひ「齡」の概念を含む。

。年切 世までと定め 持みたる 君に依りては 言繁くとも

(11三三八)

のヨは、「立ちしなふ 君が姿を 忘れずは 与の限りにや 恋ひ渡りなむ」(20四四四一)のヨに同じく、「寿命のある間」の意である。「毎年毎年、年を数へる寿命ある間までと定めて」といふのである。即ち、「毎年毎年、年を数へる」といふのが、トシキハルの意味である。

はじめにタマキハルのタマは靈魂に関はるものであることを想定した。右のキハル(時間が経過する)及びトシキハル(年を数へる)などより考へられるタマキハル(ウチ・イノチ・ヨに懸る)の意味は、「靈魂がこの身に宿つてゐる(この世の時間が経過してゐる)」といふことに外ならない。

以上、タマキハルがウチ・イノチ・ヨに懸るものについて考へた。

最後に、一例のみ遺されてゐるワ(吾)に懸るものについて考へる。

。靈寸春^{たまきはる} 吾山之於尔^{わがやまのうへに} 立つ霞 立つとも居とも 君がまにまに

(10一九二)

は、「タマキハル 現^{ウツ}の限り」「タマキハル 寿命^{イノチ}」を通過して、現^{ウツ}の寿命をもつたヒトとしてのワレの意であつたらう。枕詞は代名詞に懸らないと言はれるが、

劍大刀^名 己が心から (9一七四二)

ぬばたまの 吾が黒髪を (11二五三三・11二六二〇)

などが今一步進めば、「ツルギタチ ナ」「ヌバタマノ ワ」となる可能性は十分に考へられる、と思ふのである。

註

- ① 『古事記』『日本書紀』(岩波日本古典文學大系)、『萬葉集』(塙書房)に拠る。
- ② 拙稿「タマカギル——意味と語源——」(『叙説』第四號所収)
- ③ 珠玉については、拙稿「ヌバタマの語源」(『萬葉』第九十五號所収)二三〜二四頁にまとめた。
- ④ 阪倉篤義氏『語構成の研究』三三七頁
- ⑤ ②に同じ。

(一九八一・九・一五)